様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ２ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４７９２４９７

研究課題名（和文）家族役割行動分類の作成と家族支援ツールとしての「役割バランスマップ」の開発

研究課題名（英文）Development of classification of family role activities and "role balance map" as a family support tool

研究代表者
本田　順子（HONDA, Junko）

神戸大学・保健学研究科・助教

研究者番号：５０５８５０５７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：家族機能の維持・向上には、家族員の役割行動とその家族内バランスに注目する必要がある。そこで、本研究では、家族同心球環境理論を基盤とし、家族の役割をアセスメントできる家族支援ツールを作成することを目的とした。文献検討、半構成面接調査、質問紙調査から家族員の役割行動と家族の役割バランス、家族の役割に伴うストレスなどを明らかにし、家族員それぞれの役割行動の量と質、家族の役割バランスを可視化できるアセスメントツールを完成させた。

研究成果の概要（英文）：To maintain and improve family functioning, it is necessary to focus on family members' role activities and the proportion of their role burden within the family system unit. This study developed an assessment tool for family role. Through a literature review, semi-structured interviews, and a questionnaire survey, we demonstrated family members' role activities, family role division, and the stress of their role burden. Based on the results, we constructed a family assessment tool that measures and visualizes the quantity and quality of family members' role activities and the division of family roles.

研究分野：家族看護学

キーワード：家族看護　家族機能　家族アセスメントツール　生活時間　家族役割

1. 研究開始当初の背景

家族規模の縮小化、核家族の孤立化、女性の労働参与などに伴い、現代家族の家族機能の脆弱化が指摘されている。家族機能は家族員の役割行動の履行により遂行されることから、家族員の役割に注目した研究（女性の多重役割による負担の増大、男性の役割変化に伴う役割葛藤、ワークライフコンフリクトなど）がある（高橋桂子, 生活社会科学研究, 2008, 裴智恵, 三田社会学, 2007）。著者らは、家族員の生活時間と家族機能の関係に注目し、子育て期にある共働き家族の夫婦の生活時間と家族機能に関する研究を実施してきた（本田順子ほか, 家族看護学研究, 2006）。しかし、先行研究では、個々の家族員や夫婦（カップル）に焦点を当てた研究が多く、家族を１つのシステムかつユニットとして捉えた研究は十分とはいえず、家族システムユニットを対象とした研究が必要である（法橋尚宏ほか, 新しい家族看護学：理論・実践・研究, 2010）。

著者らの先行研究（Junko Honda, et al., 8th International Family Nursing Conference, 2007, Junko Honda, et al., 4th Hong Kong International Nursing Forum, 2010）の結果から、家族員間の役割負担のバランスと家族機能とが関連している可能性が示唆された。

筆者らは、過去に家族の役割行動をアセスメントするために、既存の社会生活基本調査（統計局）や国民生活時間調査（NHK）で用いられている生活活動分類を参考にして質問紙調査を実施したが、これらの項目は 10 歳以上の家族員を対象としており、家族員全員を評価することができないため、家族をホリスティックに捉えるためにはこれらの分類を流用するのには限界があった。また、社会生活基本調査や国民生活時間調査の目的は家族アセスメントや家族支援ではないので、その生活活動分類は家族機能を規定するような分類ではない。以上より、家族支援を目的とした家族機能を規定する役割行動の分類を新しく作成する必要があり、家族機能の向上を目標とした家族支援を実施するために、家族員間の役割バランスをアセスメントし、支援する必要がある。

2. 研究の目的

本研究では、家族内外の広義の環境をアセスメントするために家族同心球環境理論の視座から、現代家族の家族機能を規定する家族員の役割行動の内実を明らかにし、それらの分類を新たに作成し、家族機能の向上を目指した、家族の役割行動と役割バランスをアセスメントすることができる家族支援ツールを開発することを目的とする。

3. 研究の方法

1）文献, 既存の調査の検討と新しい役割行動分類の作成

医中誌 Web、PubMed を用い、“家族の役割”“家族内役割”“family role”などをキーワードとして、文献検索を実施した。文献中に記載されている家族の役割について内容分析を実施した。また、国内で実施されている生活時間に関する調査について、どのような項目が調査されているのか、時代背景とともにどのような項目が追加、削除されているのかについてまとめた。

2）半構成面接調査

所属機関の倫理委員会での承認後、A 病院小児病棟に入院または、小児科外来に通院するこどもの内、こどもの長期入院（1 ヶ月以上）を経験した家族（両親）を対象とし、リクルートを実施した。面接にはなるべく 2 名以上の家族員が参加してもらうこととし、家族員 1 名の評価だけでなく、家族システムユニット全体を捉えられるように工夫した。ただし、面接は同じ家族の構成員であっても、個別に実施し、なるべく率直な意見を聞くことができるように配慮した。対象家族には、面接の実施にあたり、研究の目的・方法、匿名性の保証、中断の自由、面接内容の録音、調査結果の公表、面接中のこどもの安全などについて、研究者から文書と口頭で説明し、書面にて同意を得た。また、研究への不参加や中断をした場合でもこどもの治療や入院生活に不利益は生じないことを保証した。

インタビューガイドとして、1）で明らかとなった家族の役割の内容と、社会生活基本調査（統計局）の調査用紙を基盤とし、1）で明らかとなった役割行動を追加した新たな役割行動分類を用いた。対象者には、入院前と入院中の全家族員の生活時間を調査した。また、入院の前後でどのような役割に変化があったのかについて質問することで、1）で作成した新しい役割行動分類にない項目を新たに追加することとした。とくに、課題となっているこどもの役割やこどもの行動についても焦点を当ててインタビューを実施した。

3）質問紙調査

所属機関の倫理委員会での承認後実施した。対象家族は A 市の特別支援学校 1 施設に通う小学校 1 年生から高校 3 年生までのこどもをもつ家族とした。学校長の承諾を得て、質問紙を全校生徒の保護者に配布し、返送をもって同意とみなした。質問紙は、2 ）の研究で作成した「SFE 生活時間モジュール」と家族の属性に関する内容とした。家族の属性に関しては、過去の家族看護学の研究を参考とし、家族員の年齢、性別、同居の有無、健康状態などとした。

4. 研究成果

1）文献, 既存の調査の検討と新しい役割行動分類の作成

文献検索の結果、国外 160 件、国内 146 件

の文献が分析対象となった。“家族の役割”に関して内容分析した結果、論文中に記述されている“家族の役割”は、家族の対内的役割，対外的役割を合わせて 45 コードが抽出された（表 1）。

これらの多くは、家族システムユニット全体としての役割を捉えているのではなく、疾患や障がいをもつ家族員の療養管理や介護の役割、育児役割のみに焦点が当てられており、それらの役割負担やストレス、ストレスコーピングについて調査された研究がほとんどであった。それらの研究では、家族の役割分担や役割の調整の必要性は明記されているが、看護職者が実際に家族内の役割調整をするような支援に関する研究はみられなかった。以上より、家族システムユニット全体の役割の状況について看護職者がアセスメントするツールの必要性が確認された。

次に、家族員の役割行動について検討するために、生活時間調査（NHK 放送文化研究所）、社会生活基本調査（総務省統計局）、放課後の生活時間調査（Benesse 教育研究開発センター）などの国内で実施されている生活時間に関する調査の資料を収集した。それらの調査を時系列で検討し、時代背景に合わせて追加されている項目（インターネットなど最新の技術に関連した項目など）・削除されている項目（娯楽の中にある園芸、麻雀など）を明らかにした。さらに以前からの課題であったこどもの役割行動の項目についても追加した役割行動分類案を作成した。

2）半構成面接調査

対象家族の属性は、すべて核家族であり、家族員の年齢は、父親は 40.7±5.1 歳、母親は 38.8±4.6 歳、病児は 8.7±3.5 歳、病児のきょうだいは 9.0±5.2 歳であった。病児の平均入院期間は、8.2 ヶ月であった。

1）で作成した新しい役割行動分類案を用いて 10 家族の 24 時間の生活時間を調査した。入院前と入院中のそれぞれ典型的な 1 日について、家族全員の生活時間を明らかにした。その結果、療養中のこどもを支える家族の行動やこども自身の行動に関する項目がさらに追加された。また、面接毎に、面接の振り返りを行い、研究者間で家族が回答しやすいように項目の名称や 24 時間の行動が記入しやすいようなフォーマットについて検討し、改良した。

入院前後の家族の役割で変化のあったものは【家族員の SOS サインを受け止める】【コミュニケーションをとる】【外部から情報を得る】などが明らかとなった。さらに、役割変化によりストレレッサーとなったものは【家族が揃わないこと】【慣れない家事】【収入の確保】などが上がった。

以上の結果から、新しい役割行動分類に、これまでの課題であったこどもの役割行動の項目や療養中の家族員がいる家族の役割行動の項目を追加し、家族員全員の 24 時間の役割行動（19 項目と自由記載）を記録でき、かつ家族の共有時間を示すことができるフォーマットに改良した「SFE 生活時間モジュール」が完成した。

表 1. 家族の役割

対内的役割（一部抜粋）	家族員の心身の安全の確保
	家族員の SOS サインを受け止める
	家事・身の回りの世話
	収入の確保
	精神的・情緒的支援
	育児・子育て
	家族員の教育・知識の獲得
	家族員の療養管理
	家族員の健康管理
	外部から情報を得る
対外的役割（一部抜粋）	地域活動等の役割
	家族の外部（医療従事者）との関係をつくること

3）質問紙調査

95 家族に質問紙を配布したところ、35 家族（回収率 36.8%）からの回答が得られた。対象家族の属性は、家族形態は、ふたり親の家族の内、核家族が 27 家族（79.4%）、拡大家族が 0 家族（0.0%）、ひとり親の家族の内、核家族が 4 家族（11.8%）、拡大家族が 3 家族（8.8%）であり、ふたり親の核家族が約 8 割を占めた。こどもの数は、1 人が 13 家族（38.2%）、2 人が 9 家族（26.5%）、3 人が 11 家族（32.4%）、4 人が 1 家族（2.9%）であり、特別支援学校に通うこども以外に兄弟･姉妹がいる家族は約 6 割を占めた。

2）で作成した「SFE 生活時間モジュール」のは、回収できた 35 家族の回答の内、96.1%が解釈、分析可能内容で回答されており、家族の役割行動をアセスメントするツールとしての有用性が明らかとなった。さらに、既存の 19 項目の役割行動の項目以外に、【こどもの宿題を手伝う】【リハビリに付き添う】【こどものリハビリを行う】などが自由記載欄に記述されていた。これら、自由記載欄に直接記入のあったデータの内容を分析し、「SFE 生活時間モジュール」の生活活動項目の名称を一部改訂した。たとえば、【子育て】としていた項目には，【こどもの宿題を手伝うこと】【リハビリに付き添う】は含まれない表現であるため、【子育て】を【こどもの世話】という名称に修正した。

以上の調査より、こどもから成人まで家族員全員の役割行動を 24 時間記述し、家族の共有時間も含めて視覚的にアセスメントできる「SFE 生活時間モジュール」が完成した。本ツールを使用することで、看護職者が実際に家族内の役割調整をするような支援に役立てることができると考える。今後、実際に

臨地での応用、有効性について検討する必要がある。

5. 主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 6 件）
①法橋 尚宏、本田 順子、佐藤 直美、最新・家族看護学研究レビュー（3）、家族看護、査読無、Vol.10、No.1、2012、pp.132-139
②法橋 尚宏、本田 順子、西元 康世、最新・家族看護学研究レビュー（4）、家族看護、査読無、Vol.10、No.2、2012、pp.127-133
③法橋 尚宏、本田 順子、高谷 知史、最新・家族看護学研究レビュー（5）、家族看護、査読無、Vol.11、No.1、2013、pp.136-143
④法橋 尚宏、本田 順子、平谷 優子、最新・家族看護学研究レビュー（6）、家族看護、査読無、Vol.11、No.2、2013、pp.141-146
⑤法橋 尚宏、本田 順子、小野 美雪、最新・家族看護学研究レビュー（7）、家族看護、査読無、Vol.12、No.1、2014、pp.142-147
⑥法橋 尚宏、本田 順子、易 覃秋子、最新・家族看護学研究レビュー（8）、家族看護、査読無、Vol.12、No.2、2014、pp.130-136

〔学会発表〕（計 9 件）
①Junko Honda, Naohiro Hohashi, Trends in research concerning the family role in Japan, 12th International Family Nursing Conference,2013 年 6 月 19 日～22 日 Minneapolis, Minnesota（USA）
②Satoshi Takatani, Junko Honda, Naohiro Hohashi, Effects of family event on the family system Unit: A concept analysis, 12th International Family Nursing Conference, 2013 年 6 月 19 日～22 日 Minneapolis, Minnesota（USA）
③法橋 尚宏、本田 順子、家族同心球環境理論に基づいた家族アセスメント／家族インターベンション、日本家族看護学会第 20 回学術集会、2013 年 8 月 31 日～9 月 1 日、静岡県・静岡市
④高谷 知史、小野 美雪、本田 順子、法橋 尚宏家族同心球環境理論（CSFET）に基づいた家族アセスメントツールを用いた家族アセスメントの実際、日本家族看護学会第 20 回学術集会、2013 年 8 月 31 日～9 月 1 日、静岡県・静岡市
⑤法橋 尚宏、本田 順子、高谷 知史、小野 美雪、西元 康世、家族同心球環境理論に基づいた家族アセスメントツールの使い方と活かし方、日本看護科学学会第 33 回学術集会、2013 年 12 月 6 日～7 日、大阪府大阪市
⑥Minae Fukui, Junko Honda, Akira Hayakawa, Naohiro Hohashi, Family stress and coping associated with family-role shift during the long-term hospitalization of a child, 35th International Association of Human Caring Conference, 2014 年 5 月 24 日～28 日, Kyoto, Kyoto (Japan)
⑦Junko Honda, Syuhei Yamamoto, Naohiro Hohashi, Alleviating the family-role burden of families who have children with special needs, 35th International Association of Human Caring Conference, 2014 年 5 月 24 日～28 日, Kyoto, Kyoto (Japan)
⑧山本 修平、本田 順子、法橋 尚宏、特別支援学校に通うこどもをもつ家族の役割負担とその要因、日本家族看護学会第 21 回学術集会、2014 年 8 月 9 日～10 日、岡山県倉敷市
⑨Junko Honda, Minae Fukui, Syuhei Yamamoto, Naohiro Hohashi, A validation study of the assessment tool for family/family member time allocation, 18th East Asia Forum of Nursing Scholars, 2015 年 2 月 5 月～6 月, Taipei (Republic of China)

〔図書〕（計 2 件）
①法橋 尚宏、本田 順子著、EDITEX、FEAI-J（家族環境アセスメント指標）、2013、46
②法橋 尚宏編著、本田 順子著、EDITEX、FEM-J（家族環境地図）のアセスメントガイド、2014、55

6. 研究組織
(1)研究代表者
本田　順子（HONDA, Junko）
神戸大学・大学院保健学研究科・助教
研究者番号：50585057